

橋本侃さんを悼む

岩 崎 豊太郎

橋本侃さんの急逝の報らせを受けたのは本年の二月十六日であった。未だわたしの心は沈静していないが、心の深淵から浮かび上がってくる思い出を記したい。

橋本さんの人柄の温かみと、若い才能を啓発する雰囲気、研究室にいつも漂っていた。また、「橋本先生は出席は厳しいが、授業が面白い」と学生が話すのを聞いていた。

橋本さんは何事にも積極的であった。神奈川大学入試センターの所長として、また英語英文学科の主任やカリキュラム委員長として活躍され、大学や学科の発展にとってどれほど大きな貢献があったか今さら言うまでもない。とくに入試作問で真骨頂を発揮された勇姿がひととき印象深く思い出される。

わたしがはじめて橋本さんに出合ったのは、赴任した昭和四十九年（一九七四年）のことであった。わたしは三十七歳で、橋本さんは自ら「二十代」と称しておられた新進気鋭の学者であった。以来、同じイギリス文学の専任として三十三年間、非常勤講師として二年間、都合、三十五年間お付き合いさせていただいた。橋本さんは神奈川大学では一年先輩であったが、青山学院大学ではわたしが先輩であった。なお、わたしの恩師、

伊東好次郎先生を囲む「渦の会」が発足してから、わたしたちは同人仲間となった。当時、大学は紛争のピーク期を過ぎていたが、まだ混乱した状態にあって、期末試験ができず、レポートに切り替えて成績評価をしたことや、教職員が腕を組んで通用門を出たことや、会議室に泊まり込んだり、学生部委員の橋本さんと入試の日の朝に、ドラム缶に薪を焚いて警備に立ったこともあった。

学科のカリキュラム合宿が大学の箱根保養所で例年二月に開かれて、年によっては送別会が行われた。学問ではなく恐縮であるが、橋本さんが健康であったときに、夜に余興として腕相撲をしたことが数度あった。橋本さんは、高校時代に国体に柔道選手として出場した猛者であった。右手では、相手をグイッと持ち上げる握力が非常に強く、とても太刀打ちできなかったもので、左手を組み合わせてしまったものだった。二人とも童心に返って興じたことを思うと、胸が熱くなる。

橋本さんは演劇（シェイクスピア）の専門家として研鑽を長年積まれて、平成十九年（二〇〇七年）に『ヘキュバのために！シェイクスピアの主人公に与えられた選択肢』（欧友社）を出版された。それより五年前に癌の手術をされていたが、もともと体軀のがっしりした方であり、最新医療を受けておられたので、ご回復されるであろうと、平素わたしは樂觀していた。昨年、春に出講したときに、お元気そうであり、また、夏季ゼミ合宿をされたと聞いていたので、十一月下旬に久しぶりに二十号館の受付で挨拶を交わした時に、最後の出会いになるうとは夢にも思わなかった。橋本さんは、「退職の時には書くよ」と反射的に語ってくれていた。『人文研究』第一六一集（二〇〇七年）に記された「岩崎さんのこと」を新たに読ませていただき、橋本さんの恵まれた文才に感銘し、感謝の念を深めている。橋本さんとふたび親しく言葉を交わせないのであるが、まことに

残念であり、
かぎりなくさびしい。
今はひたすら安らかなご冥福を祈るばかりである。